
魔法少女リリカルなのはSatan blazE

ぱぷりか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはS a t a n b l a z e

【Nコード】

N 2 4 7 2 W

【作者名】

ぱぷりか

【あらすじ】

どこにでもいる普通の少女、黒衣マトが手に入れたのは蒼い寶石。手にしたのは蒼炎の力。今、炎を宿す少女の物語が紡がれる。

EX01「蒼炎の目覚め」

1

五月の上旬であるこの時期特有の、早春より徐々に強くなっている――だが未だ陽気な日差しが照らしつける。整備されたアスファルトの道やビルなどの建物は熱気を帯びているが、それでも夏には遠く及ばず、まだまだ暖かいという域を出ることは無かった。

そんな太陽が西へと傾き始め、青かった空に黄色味が出てきた頃、駅前の歩道を四人の少女たちが楽しそうに歩いている。まだまだ幼さを多分に含んでいるあたり、十代前半といったところだろうか。

その内二人はセミロングほどの長さの黒髪をストレートに下ろしている。髪が蒼味掛かっているか紅味掛かっているか、瞳が蒼か紅であるかの違いはあるが、顔の造りなどはほぼ同じだった。まるで同じ人間が微妙に変装でもしているかのように。

一人は他の三人よりも頭半分ほど身長の高い、緑を含みウェーブの掛かった髪をしている少女。

もう一人は逆に頭半分ほど身長の高い、茶色味を含んだ灰色の髪をおかつぱのようなショートヘアにしている少女だった。

キャッキヤと楽しそうに会話を続ける彼女たちは、みんな同じ服を着ている。それはどこからどう見ても学校の制服にしか見えず、時間的なことを考えれば下校途中だということは一目瞭然だった。

「でもヨミってホント好きだよ。絶対小学生の趣味じゃないと思うけどなー」

「そ、そう?」

「マトの言う通りだよ。ねっ、ユウ?」

「そーそー、マリに賛成するのだ」

蒼味掛かった黒髪に蒼い瞳の少女——マトが少しだけ意地悪そうに言えば、彼女の左隣を歩く瓜二つの容姿をした、しかし髪や瞳の色が異なる少女——マリも乗っかってくる。さらにはもう一人、マリの左を歩くシヨートヘアの少女——ユウまでもが同意したが、マトの右を行く弄られているウェーブの掛かった髪の少女——ヨミは特に気にした風でもなかった。

「いろいろ探してみて、綺麗なのとか見ついたら楽しくなったり、嬉しくなったりするんだけど」

「ははー、ヨミ先生は大人ですなー」

「もうマトってば！」

「あははっ、ごめんごめん、怒った？」

「別に怒ってません」

マトにからかわれたヨミはプイツとそっぽを向いてしまう。そんな彼女に、マトは尚も冗談っぽく言う。

「えー怒ってるじゃん」

「怒ってませんー」

まるで夫婦漫才でもしているかのような二人を見て、

「あはははは」

「ぶはっ、おつかしー」

マリとユウが大袈裟に笑い出した。それにつられてか、マトとヨミもお互いを見つめ合った後、同じように吹き出したのだった。

四人が笑っていればこの上ないほどに目立つ。雑踏の中、周囲の視線を集めてしまうが、彼らはほとんど反射的にそうしただけであり、特に興味を持つことなく何事もなかったかのように通り過ぎていく。

マトたちもそれを別段気にしている様子は無く、目的地を目指して歩みを進めていく。

やがて、何かの店の前で足を止めると、

「着いた着いたー」

と、ごく自然に入店した。

それほど広くはない店だが、店内には明るい雰囲気が漂っており、若者向けに今風の小洒落た装飾がなされていた。

店のドアには鈴の音が鳴るドアチャイムが付けられており、それで来客を知ったようで、奥からは三十歳前後の男性が現れた。細身の長身に端整な目鼻立ちをした、所謂イケメンと言われるような人物であった。

「いらっしやい皆、久しぶりだね」

少し低めの、しかし優しい声がマトたちに掛けられる。その言葉が、この男性と彼女たちとが以前から付き合いがあることを証明している。

「はい、お久しぶりですねクロードさん」

「一週間振りかな？ またヨミちゃんに連れて来られたのかい？」

「そうですね。ね、マリ？」

「はい、ヨミ先生が行くって聞かなくて」

「ヨ、ヨミ先生……ぶはっ、思いましたらまた——ブフッ」

「ちょ、ちょっと皆！」

再び弄られるヨミは少し焦ったように三人を制止し、そして、と続ける。

「だってこのお店のアンティークって人気だから、小まめに来ないと良い物逃しちゃうかもしれないでしょ？」

ヨミが言う通り、この店は主にアンティーク——骨董品を扱っていて、さらに値段が手頃な物も多数あるため人気のある店なのである。それこそ、今日あった商品が数日置いて再来店した時には売れてしまっているほどである。

それ故にヨミはマトたちを誘って頻繁に来るのである。また、彼女たちもこの店を結構気に入っているため、ヨミをからかいつつ共に訪れるのである。

「それじゃあ、ごゆつくり」と、クロードは店の奥に引っ込んで行った。

そしていつものごとく、各々が見たいものを見て回り始める。

一言にアンティークと言っても、それに該当するような物は多種多様に存在している。本来の意味での古美術品や古道具はもちろんのこと、現代ではそれらから派生した古いだけで実際には役に立たない時代遅れな物までもが含まれている。

それぞれが好きに見て回っている中、マトの目にふと何かが映った。周りには他にもいろいろな品が置かれているのだが、どうしてかそれが彼女の意識を強烈に惹き付ける。

気付けば、マトはいつの間にかそれを手にしていた。

「これ……綺麗」

マトが手にしたのは透明な小さいガラスケース。その中には直径五センチメートル程の球体形をした半透明の蒼い石——いや、宝石が入っており、その内部では炎を思わせるような小さな光が揺らめいている。

《見つけた》

「え？」

突然、頭に誰かの声が響いた気がしたマトは、周囲をキョロキョロと見回すが、居るのは他の三人だけだ。

と、その時だった。

「マトちゃん」

「うわあっ!？」

いきなり背後から掛けられた声に、マトの心臓が跳ね、思わず飛び上がりそうになった。なんとか抑えて振り返る。

「な、なんだクロードさんか」

「そんなに驚かなくても。ところでそれ、気に入った？」

「ああ、コレですか。気に入ったというか、凄く綺麗だから見惚れてたといいますか……」

「ま、確かに綺麗ではあるよね」

「なになに、どうしたの？」

そう話す二人の所へ他の三人も集まって来る。

「ほら、コレ綺麗でしょ？」と、マトが宝石を見せると、三人も物珍しそうに見入っている。と、そこでヨミがマトの後ろに色違いの同じ宝石が置かれている事に気付いた。

「色違いもあるんだ」

「あーホントだ」

ユウが真つ先に食い付き、黄色い宝石が入れたケースを、ヨミが緑色の宝石が入れたそれを手に取った。

「こっちも凄く綺麗」

「だねー」

「もう、私これしか残ってないじゃない」と、マリが一つ残っている紅い宝石の入ったケースと取る。

「皆それを気に入ってくれてるみたいだし、プレゼントするよ」

クロードの申し出に四人は驚き、次いで少しだけ気まずそうにする。彼はああ言っているが、商売しているのだからいくらなんでもそれはマズイのではないかという思いが彼女たちにはあるのだ。

彼としては日頃よく来てくれる四人に感謝を込めて、たまにはプレゼントするのもいいと思ったただけなのだが、彼女たちからすればそうではないらしかった。

「気にしなくていいよ、よく来てくれる君たちに僕が勝手にプレゼントするだけだからね」

「え、えーと」

四人が視線を交わして会話する。

「それじゃあありがたくいただきます」

「ありがとうございます」と、四人分の嬉しそうな声が店内に高らかに反響した。

マトとマリの二人は帰路に着いていた。あの後暫くして店を後にし、駅でヨミ、ユウと分かれて現在に至る。

「今日の晩御飯何かなー？」

「確かハンバーグだったと思うけど」

「ホントに！？ やった！！」

「マトってホントにお肉好きだよね」

若干呆れたようにマリが言う。

「えー、お肉美味しいじゃん。マリだって好きでしょ？」

「好きではあるけど、お魚の方が好きだもん」

「ふーん。まあそれはそれで美味しいけどさー」

他愛のない話をしていた二人の会話が一度途切れると、周囲がざわついている事に気が付いた。拳句の果てにはサイレンの音まで聞こえてくるのだ。気にならない訳がなかった。

「ん、何だろ？」

「何かあったのかな？」

二人が疑問符を浮かべている横を、幾人かが走って通り過ぎていく。

「強盗が立て籠ってるってホントなのか？」

「ああ、この先の銀行だつてよ」

擦れ違いざま、そんな会話が二人に届いた。それを理解した瞬間、彼女たちの顔に焦りの色が濃く滲み出る。

「ぎ、銀行って……まさかお母さん！？」

「マト、行こう！」

「う、うん！」

二人は弾かれた様に、そして矢のごとく掛けだす。

彼女たちがここまで焦っているのは他でもない。強盗が立て籠ったらしい銀行は母親の勤務先なのである。

万が一何かあったら。

そう思うとしても立つてもいられないのである。たとえ、現場に行ったところで何も出来る事が無いと分かっていたとしても。

「はあはあ——お母さん絶対無事だよ、マト——え？」

数十メートル走ったところでマリが自らに言い聞かせるようにしながら振り返ると、そこにマトの姿は無かった。

自然と足が止まる。

「マト！ マトどこー！？」

乱れた息を整えることもせず、ただ叫ぶ。マリと同じように現場へと向かう人は思いのほか多い。普通ならマリの行為は周囲の視線を集めてしまうものだが、状況が状況だけに彼らは皆^{みな}マリには目もくれないし、そうでなかったとしてもチラッとほんの一瞬見るだけであった。

「マトー——！」

いくら叫んだところで、自分と非常によく似ているマトの声は返ってこない。

「……仕方ないか」

マトの事は非常に気になるが、彼女とて一人では何もできない子供という訳ではない。それに先程、銀行へ行こうと二人で掛けだしたのだから、そこで会えるはずだと思ったマリは再び駆け出した。

今は何より、母の安否を確かめずにはいらなかった。

マリと共に駆け出してすぐ、マトは異変に気付いた。左肩に掛けているスクールバッグが妙に明るいのである。より正確には、何かが発光しているようなのである。

走りながらバッグの口を開けてみると、先程クロードから貰った宝石が店にあった時よりも強い光を発していた。

思わず立ち止まってカバンから取り出し、ケースを開けて中身を手にとった。回しているいろいろな角度から見ても、内部の炎の様な光が強まっているだけではない。その原因こそ分からないが、それ以外の変化は特に見られない。

その時、

「痛っ!？」

事件現場へと向かう野次馬根性丸出しの人物たちの一人の肩が擦れ違いざまにぶつかり、マトはバランスを崩して転びそうになった。しかしそこは学校でも運動能力が高いと言われているだけあり、どうにか立て直した。

しかし、

「あ、いけない」

ぶつかった拍子に右手に持っていた宝石がそこを離れ、狭い路地へと転がりこんでしまったのである。

マトは慌てて追いかける。

球体であるが故にコロコロと転がっていつてしまうため、すぐには追いつけないが、一〇メートル程の所で宝石は止まり、無事に拾う事が出来た。

「ああーどうしよう。変に傷とかついてたら……」

せつかくクロードの好意で貰った物に、即日傷をつけてしまったら顔向けできなくなる。そこまで思ってしまったマトは焦りつつ、落とさないように気を付けながら様々な角度から確認する。

「はあ、よかったあ」

割れたり傷付いたりするのは免れない状況だっただけに、奇跡的に無事だったことに安堵の溜め息を漏らす。

そしてマトがケースにしまおうとした瞬間――

「きゃあっ!？」

どこまでも猛々しく、不気味な程蒼い炎に宝石が包まれたのである。驚くと同時に、本能が身を守るために反射でそれを投げ捨てる。だが。

本当ならば地面に落ちる筈の宝石はそうならず、マトの数メートル前方で宙に浮いて制止している。

「な、何？ 何なのコレ!？」

理解できない状況にマトは恐怖心を煽られ、彼女はそこから逃げ出す事が出来ない。

やがて、制止していた宝石は炎に包まれたままマトへとゆっくり接近していく。

おそらく意識はしてない。無意識に、ただ防衛本能の命令によるまま、マトは一步、二歩と後退りを始める。しかし恐怖の方が強く、足が震えているせいか、その後退りは大して意味を持ち得なかった。

「嫌……来ないで！」

マトの叫びも虚しく、激しく燃え盛る蒼い炎に包まれた宝石は、無情にも彼女に溶け込むようにして姿を消すのだった。

EX01「蒼炎の目覚め」（後書き）

初めまして、ぱぷりかです。

まず最初に言っておきますが、この作品は作者一人で作ったものでは無く、友人がネタを提供するので代わりに書いてくれと頼まれた事から始まりました。

なので、決して某短編のパクリとかでは無いので、そこは注意して下さい。

ネタ提供元の友人も、作者である自分も何かと忙しい身なのでタグにあるように更新は不定期となりますが、読んでくださる方は気長にお付き合いください。

それではまた次回で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2472w/>

魔法少女リリカルなのはSatan blazE

2011年8月30日03時19分発行